
死刑執行人制度

結城陸空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死刑執行人制度

【Nコード】

N1916B

【作者名】

結城陸空

【あらすじ】

2014年、世界は遂に1つの法律を作り出した。それは『死刑執行人制度』。一般人が死刑を執行するというこの制度がもたらしたものとは？そして、死刑執行人制度に選ばれた1人の男の運命は！？

前編：始まり（前書き）

日本ケータイ小説大賞へと出していた作品です。ようやくリメイクが出来ましたので掲載します。一度読まれた方ももう一度ぜひ読んでみてください。小説大賞には掲載しなかった。真実があります。では、どうぞよろしくお願いします。

前編：始まり

暑い。

今年の梅雨は雨が例年に比べて降らず、水不足となった。

当然、俺も節約をする破目となり、苦しい思いをしている。

夏も例年より、暑く各地で観測史上最高の気温の高さとなつているとニュースでやっていた。やはり二酸化炭素による温度上昇は食い止められていないようだ。

俺はこんな暑さの中、スーツを着て片手には携帯電話を握り、外周りをしている。

額からは、この暑さで温度を上げている俺の顔面を冷やすための冷却水とも言うべき塩水が溢れんばかりに吹き出ている、スーツを着ていて見えない部分からも、同じように塩水が俺の身体を冷やすべく流れ出ている。

俺は、携帯を持っている手とは違う逆の手で、ズボンのポケットから汗を吸って少し濡れているハンカチを取り出し塩水という汗を額から拭きとった。

冷却水を無くした顔面は、再び暑さによる熱を取り戻すがそんなことは気にしてられない。

俺はこれから大事なお客様とのビジネスを控えているからだ。

大手のIT企業に就職した俺は、インターネットを使って商売をしていない個人営業店へ、インターネットへの商品の掲載の許可を得るためにお客の家まで向かっているのだ。

外は地獄の業火で焼かれているかのように暑いが、これが終わりに会社に戻ればクーラーの効いた部屋でパソコンに向かったの仕事だけで済む、だから俺は早くこの外周りの仕事を終わらせたかった。

早歩きで行ったおかげか自分で思っていたよりも早くお客の家に着いた。

その家は一階の一部を改造して子供のおもちゃを販売している。外からもそのおもちゃの一部が見える。

俺は呼び鈴を鳴らし、お客が家から出てくるのを待った。

「はい！」

出てきたのはオーナーの奥さんだった。俺は一礼をした後、今日約束していたとの旨を伝えた。

奥さんは心置きなく通してくれて、家の中に入るとクーラーがよく効いていて、さっきまでいた外とのギャップに鳥肌がたつくらいだ。

家の奥の応接間に通されると、そのお店のオーナーがタバコを吸いながら静かにテレビを見ていた、テレビから流れる音声が自然に俺の耳にも入ってくる。

そのテレビの内容は、去年施行されたばかりの死刑執行人制度と

いう法律についての特別番組だった。

死刑執行人制度は、2009年に正式に施行された裁判員制度の後版で2014年に正式施行された、なんでも死刑囚の死刑の際に、本来の死刑執行人の変わりに電気椅子のスイッチを押さなければならぬらしい。

馬鹿げた法律が出来たものだ。

俺は例えどんなに凶悪な犯罪者でも死では罪は償えないと思ってる。

償うには生きて社会に貢献すべきだと思う。

だけど……。

俺にははっきり言って関係のない話だ、死刑執行人に選ばれるのは極一部の人間だけ、日本にはかなりの人数の人間がいるのだから俺が死刑執行人に選ばれるなんてあるわけがない。

だから、俺にはまったく関係のない話だ。

それより俺は今、目の前にあるビジネスを成功させるほうが大事だと思ってる。

その後しばらくオーナーと話をした後、俺は会社に戻った。

会社に戻った俺は、地獄の業火から開放され、クーラーの効いた部屋で残りの仕事に取り掛かった。

仕事をしていると、同僚が話しかけてきた。

「おーい、一樹^{いつき}！ 今日合コンいかねえか？」

「合コンか……、悪い、合コンはやめとくよ」

「また？ お前飲みには行くのに合コンは絶対行かねえよな？」

合コンは女との出会いの場。俺にはそんなところには行きたくない理由がある。そんな同僚の誘いも断り、俺はさっさと残りの仕事を済ませ、家路に着いた。

外は昼の暑さに比べると、夜はかなり涼しい、それでもまだ暑いことに変わりはないが……。

俺は、今年から安アパートで1人暮らしを始めている。

社会人にもなったし、いつまでも親の世話にはなっていられないと思ったからだ。

アパートへと帰ってきた俺は、アパートの入り口の前にある郵便受けをいつものように開けて中を確認した、中にはいつものように勧誘の郵便物が入っている。

今年の四月からこのアパートに住み始めた俺の部屋の郵便受けには、毎日のようになにかの案内状や勧誘の手紙などが入っている、つまりいらぬものばかり……。

しかし、今日は違った。

郵便受けの中に、他の封筒やら手紙やらと一緒に黒い封筒が入っていた。

「なんだ？ これは……？」

神谷 一樹 様 という俺の名前だけが白い文字で書かれている黒い不気味な封筒。

俺は、それを見て鳥肌が立つほどの寒気を感じた。

俺はエレベーターを使い、三階にある自分の部屋へと行くため足を動かした、三階のエレベーターの真正面に俺の部屋はある、エレベーターを降りた俺は、真正面にある俺の部屋の前まで来るとカバンから家の鍵を取り出し、ロックを解除した。

部屋の中に入った俺は、部屋を見渡す。

俺の部屋には、机や冷蔵庫などの生活に必要な物以外にも置いていない。部屋になにかと物を置くのは邪魔だし、汚く見えるからだ。

でも、机の上には1つだけ写真立てが置いてある。写真立てには一枚の写真が飾られている。写っているのは俺と、昔付き合っていた彼女。

彼女の名前は、葵^{あおい} 由奈^{ゆな}。高校生の時に付き合っていた女の子だ。彼女はとても明るく、元気があり、俺は彼女が大好きだった。

でも、付き合い初めて5ヵ月後に死んだ。

事故や病気じゃない。

殺されたんだ。

裏路地で見つかった由奈の死体は裸で全身を切り刻まれ、必死に抵抗したであろう痕跡がたくさん残っていた。そして由奈には右腕がなかった。警察の話では犯人が持っていたのだらう……と。

犯人はまだ捕まっていないと思う。

思う……と言うのは、俺は由奈のことを乗り越えることが出来たからだ。一時は犯人を殺したいという復讐の気持ちと由奈を守れなかった自分の不甲斐なさを呪って死ぬことさえ考えた。

でも、俺はそれ乗り越えた。

乗り越えることが出来たのは由奈のおかげ。由奈と付き合っていた5ヶ月の間に由奈が俺に言った数々の言葉のおかげ。由奈は死んだけど、まだ俺の中ではしっかり生き続けている。そう思うと、俺は立ち直ることができた。

俺は、由奈と俺の写った写真を見ながら由奈のことを思い出し、手に持っていた郵便物を机に置いた。

そして、先ほどの黒い封筒を立ったまま手に取った。

こうして、この黒い封筒だけ手に取ってみると、嫌に不気味だ。

まるで昔、流行った不幸の手紙を思い出す、だがこの手紙はそん

なオカルトとは違う不気味としか言いようのないオーラを放っているようだった。

俺は、近くにあったハサミを手に取り、封筒の最先端を横に真っ直ぐ切っていった。

中には、白い紙に黒い文字で印刷された紙が数枚入っていた、中身を封筒の外に出し、俺はそこに書かれている文章を読み始めた。

俺の額からは、昼間流れた塩水が流れ出してくる、だが昼間とは違う……。

背中には寒気を感じて、足は力が入らず立っているのがやっとで力が入り、小刻みに震えている、唇は青くなり、眼は血走り、顔面は白くなった、紙を持つ手も震えている、まるで身体全体でその恐怖を感じているかのように、俺の全身は氷ついた。

封筒の中に入っていたものは、死刑執行人とはどういうものかが書かれた内容の紙と、その死刑執行人に選ばれたという内容の紙だった。

俺は、全身が金縛りにあったかのように小刻みに震え、声が出なくなっていた。そのため俺は、手に封筒の中身の紙を持ったままそこに立ちすくんでいた。

この瞬間、俺は人をこの手で殺すことが決まった。

いままで、関係のないことだと思っていた。

この制度に選ばれる人は極わずか……、宝くじで一等を当てるよ

り少ない確率だとテレビで言っていたし、まさか俺が選ばれるなんて夢にも思わなかった。

俺は手に紙を持ったそのままの状態で、そこに書かれていることを何度も何度も熟読した。

肩の力が抜け、やっと床へお尻をついた頃には朝になっていた、つまり会社へに行かなければならない時間になっていた。

気分が重い……。

俺は、着替えもせず風呂にも入らず、朝ご飯も食べず、一睡もしないで再び会社への道のりを歩いていた、どんな状況だろうと休まないと入社時に心に決めたからだ。

手に持っているカバンの中には、仕事の資料や、読みたい小説などが入っているが、今日は黒い封筒も一緒に入っている。

法律で、死刑執行人に決定したという案内の封筒が来た時は、会社へ通達しなければならないと、この封筒の中に入っていた紙に書いてあったからだ。

この死刑執行人制度という法律からは、よほど特別な理由がない限り、辞退することはできない。つまり俺は確実に人を殺さなければならぬ。

会社に着いた俺は、自分のデスクにカバンを置き、すぐに上司の所へ行った。

上司は電話中だったが、俺が黒い封筒を前に差し出すと、驚いた

ような表情を見せ、電話先に後でかけ直すと言って電話を切り、俺の顔をジッと見た。

「これは……。まさか……？」

「そうです。死刑執行人への決定通達書です」

俺は上司の顔色を伺いながら、封筒を差し出した。

上司は封筒の中身を確認すると、中身を再び封筒に入れ俺に手渡した。

「……わかった。社長にも通達しておこう。それと今日はもう帰ってもいいぞ」

「……ありがとうございます」

俺は深々とお辞儀をして、その場を後にした。

休まないと入社時に心に決めていたのに、早退してしまった。そんな自分が悔しかった。

俺は、再びデスクに戻り、カバンに封筒を入れるとカバンを持って会社を後にしようとした。

「おい、聞こえたよ。一樹ー！」

話かけてきたのは、同僚だった。

「お前、死刑執行人制度に選ばれたんだって？ やったな！」

「……、やった？」

なにを言ってるんだ。こいつは。

「だって、法的に人を殺せるんだぞ？　普通、人は殺せないからな。羨ましいぜ！」

俺は、その言葉に一気に頭に血が上ってしまった。

「羨ましいだど！？　ふざけるな！！　なんで殺したくもないのに殺さなきゃいけないんだ！！」

俺は、すぐ横にあったデスクに思いつきり手を突き言い放った。

その声で周りにいる全員がこっちを見る。

「……っ。おいおい、キレるなよ」

俺は、その男を睨みつけ、なんにも言わずに会社を出て行った。

今日は家で落ち着きを取り戻そう。

家についた俺は、部屋の中にある唯一の机に備え付けられていた椅子に座り、写真と向かい合わせになって座った。

写真には笑顔の由奈と俺が写っている。

由奈の夢は歌手だった。

始め出会ったのは、学校内で……あれは文化祭の日だった。

由奈は有志として学校の体育館で歌を歌っていた。彼女の声は透き通るように綺麗で俺は、いつの間にか聞き入るように聞いていた。歌を歌い終わった彼女はバンドのメンバーと共に舞台から降りてきて、1人1人にお礼を言っていた。もちろん最前列で聞いていた俺にも……。

「聞いてくれて、ありがとう」

それが、俺の聞いた初めて由奈が俺に発した言葉だった。

その後、俺達は運命のように惹かれ合い、付き合うことになった。

昔のことに想いを寄せていると突然インターホンがなった。俺は急いで玄関に駆け寄って行き、ドアを開けた。

そこには、郵便員が立っていた。いつもは、アパートの入り口に備え付けてある郵便受けに入れるのに……。

「速達です。サインもらえますか？」

なるほど、速達か。俺は所定の位置にサインをし、郵便物を受け取った。郵便員は元気よくお礼を言って、エレベーターへと乗った。

郵便員がエレベーターで下へ降りるのを確認した俺は、ドアを閉め郵便物を見た。それは昨日の封筒のように黒く、しかし少し大きめの封筒だった。

黒い封筒……、これは恐らく死刑執行人制度に関する封筒だろう。

中身を開ける前にそれを確信した俺は、再び全身が寒さに襲われた。真夏の昼間にも関わらず……。

再び椅子に座った俺は、机に置いてあるハサミを使って封筒を開ける。

封筒の中身を取り出した俺はおそらく、いや確実に驚きの表情をしているのだろう。この封筒に入っていたのは、俺が処刑する死刑囚の資料だった。

資料には、死刑囚の顔写真、死刑囚の生まれた時からの経歴や犯した罪の詳細に至るまでこと細かく書かれていた。俺は恐る恐るその資料に書かれた文字を読み始めた。

死刑になるのは男だった。名前は牧村 まきむら 大輔 だいすけ 35歳。これはこの男自らが記したものののだろうか……趣味の欄を見ると『人間狩り』と書かれてあった。

それを見た俺は全身に鳥肌が立ち、手には汗が吹き出していた。

しかし、その後に書かれていたその言葉は、俺が胃に含んでいたものを吐き出すには十分なものだった。

趣味『人間狩り、殺した人間の一部を食べること』。

狂っている。

こいつは狂気をはらんだ……異常殺人者だ。

もう、読むのはやめたくなった。こんな奴は死刑になって当たり前だとさえ思ってきた。でも……法律上送られてきた資料にはすべて目を通さなければならぬ。後で目を通してないことが知れたら……罰を受けるらしい。

仕方なく、半ば強制的に俺は残りの資料も読むことにした。

次に出てきたのはまたもや衝撃的なものだった。

殺した人間のリストが出てきたのだ。殺された人間のことにしても細かく書き記されている。俺は上から順に目を通していく。

順番に見ていくと、殺しているのは全て女か子供ばかり全部で23人。なんて冷血非道な奴だ。こんな人間がいるなんて信じられない。

多少の怒りを覚えながらも俺は意外と冷静にリストを見ていた。けどそれは21番目までだけだった。22番目のリストを見た瞬間、俺の手には自身の爪で手のひらを押し潰しそうなくらいの力が入り、目はその文字以外は視界に入らないくらい一点だけを凝視し、心臓は自身の動きをしつかり確認するかのように激しく脈打っているだろう。それに伴い椅子に座っていた俺の身体は自らの意思とは無関係に立ち上がった。

そこには、葵 由奈の文字があった。

殺害されたのは街の裏路地、裸にされた上に全身を切り刻まれ、さらに右腕をもぎ取られ血だらけで死んでいた所を偶然に通るかかったゴミ収集者が発見。と書かれていた。

それは、間違いなく疑いようもないくらい確実に由奈だった。

俺は事件の日、そのすぐ近くを歩いていた。由奈と事件現場のすぐ近くの駅で待ち合わせをしていたからだ。

時間になっても現れない由奈が心配になり、携帯にかけようとした時、パトカーと救急車が目の前を通り、駅のすぐ近くに止まったので俺は、野次馬になると分かっているながらも好奇心でパトカーの止まっているところへと行った。

人ごみをなんとか掻い潜り野次馬の最前列で俺が見たのは、無残な由奈の亡骸だった。

由奈はコイツに殺されたんだ。

あの日の由奈の姿が俺の頭に蘇ってきた。裸で切り刻まれ、右腕を無くし血だらけになった由奈の姿が……。

その時、俺の中で消え去っていた……いや、正確には小さくなっていただけで消えてはいなかったのかも知れない、復讐という名の炎が再び命を吹き返し激しく燃え始めた。

俺は、由奈のカタキをとることが出来るのだ。

しかし、それと同時にこんな男から由奈を守れなかった自分が惨めで仕方がなかった。あの日、由奈とあの場所で待ち合わせをしなければ、由奈は死なずに済んだかもしれない。

心の奥底に閉まっていた犯人への憎悪と自分への後悔が大きな鎖となって自分の精神を昔のようにきつく締め付けていくようだった。

封筒の中にはあと数枚、紙が入っていた。

それはこの異常殺人鬼、牧村大輔の母親から俺への手紙だった。そうだ、こんな異常殺人鬼でも人間……、母親はいる。俺はその事実には少し変な気持ちになった。

俺は封筒の中に入っていたその手紙を取り出して、文面を読み始めた。

そこには、牧村大輔に関する様々なことが書かれていた。生まれた時のこと、小学校や中学校でのこと、高校生、大学生までのことが何枚もの紙に書かれてあった。親の想い、そして息子が殺した人達への謝罪。

その母親からの手紙の一文に、あることが書かれていた。それは、人間に見せる手紙の内容としては不相応のものだった。

それは、牧村大輔が殺人鬼へと変貌した事件のことについてだった。

牧村大輔は、大学生まで普通だったらしい。友達もそれ並にいて普通に大学生活を送っていたそう。

牧村大輔は山岳部に入っていた。

ある日、山岳部の部員達6人である山へと登ることになったらしい。季節は冬だったが念入りに天候をチェックし、最良の日を選んで山登りを始めたらしい。頂上には何事もなく順調に着き、頂上に設置された小屋で一夜を過ごすことになったらしい。

けど山の天気は非常に変わりやすい、天気予報ではその日から三日は晴れが続くと言っていたのに、その日の夜から猛吹雪が吹き荒れ始めたらしい。

部員達はその小屋から何日も身動き出来ず、寒さと空腹により少しずつ命を削られていったようだ。一泊二日の予定だったために、たいした食料も持ってきておらず、食べるものもないこの空間に漂うのはただの冷気だけだった。

三日目の朝、部員の1人が死んだのだ。それを見た部員の1人が異常行動に出た。

そう、あまりの空腹からかその死体を食べ始めたのだ。

あまりの光景だったらしいのだが、他の部員達もお腹が減っていたためにその部員のようにみんな死んだ部員の肉を食べ始めたらしい。

でも、その時でさえ牧村大輔は食べようとしなかったようだ。そんなことをしてまで生きたくなかったのか、他の部員達が人肉を食べている時も隅っこのほうで固まって震えて座っていたようだ。

数日後、牧村大輔は衰弱していた。他の部員達は人肉を食べたことにより、まだ牧村大輔よりは元気があった。

再び、空腹が襲ってくる。そんな時に犠牲になるのは一番死にそうな人間、その場においては牧村大輔だったようだ。

他の部員達は一斉に牧村大輔を殺しにかかったらしい。

さらに数日後、山が晴れ、救助隊が小屋に到着した時に見たものは、五体の死体の傍らで、死体の肉をおいしそうに食べる牧村大輔の姿だったらしい。

牧村大輔は、救助された数日後に姿を消し、その後すぐ、殺した人間の一部を食べるといふ事件が多発。それが牧村大輔だった。

俺は、その内容を読んだ時、心に迷いが存在していた。

牧村大輔は間違いなく殺人鬼。

でも、それには理由があつて……。

俺がもし、その時にその場にいたら、みなと同じように死んだ部員の肉を食べていたかもしれない。絶対に食べるわけがないという保障は出来ない。

そう考えると、牧村大輔は運が悪かったただけなのかもしれない。

もちろん救助された後、失踪し、異常殺人をしてきたことは許されることのない事実である。だけど牧村大輔が異常になったのも全てこの事件があつたからだ。

俺があの日、由奈とあの場所で待ち合わせをしていなければ由奈は死ぬことがなかったかもしれない。でもそれと同じように、牧村大輔もあの日その山に登らなければ異常者になることもなかったかもしれない。

牧村大輔を殺すことは正しいことなんだろうか……、俺の頭にそ

んな疑問が浮かびあがった。

もしも由奈ならどう思うだろうか……。そういえばあの時、由奈は。

「あゝ!!」

「な、なんだよ由奈、いきなり大声だして」

俺は、由奈の突然の大声に驚いて、由奈のほうを見た。だが由奈は俺のほうを見ていない。由奈の視線は由奈のずっと先のほうを見ていた。

「コラー!! なんてことしてるのよー!!」

由奈は怒っているような声で、視線の先のほうへと走り出した。俺も由奈の走っていったほうに視線を移動させる。そこには道路の真ん中で無残にも車に轢かれ死に絶えた猫の死体に群がるカラスがいた。

由奈は大声をあげ、カラスの群れを猫の死体から追い払った。

猫は、車に轢かれたのだろうか、それともカラスにやられたのだろうか……。内臓が飛び出し血だらけだ。俺も由奈のいる猫の死体のほうへと歩み寄って行った。

「かわいそう……。この子はなにも悪くないのに」

由奈は猫の死体をジッと見つめていた。

普通の高校生ならこんな光景を見たら、誰も近寄らない。見ようとさえ、いや……気にかけることすらしないだろう。現に俺も見えていたのに、気にもならなかった。けど、由奈は違った。

でも、さすがに次に由奈がとった行動には驚いた。

由奈の手には、身体から臓物が飛び出し、血まみれになっている猫が抱かれていた。

「ゆ、由奈!？」

由奈の手は猫の血で赤く染まっている。いや、服にも血が付いている。

由奈は無言で道路の端まで、猫を抱いて歩きだし、道路の端の土になっているところに猫の死体を降ろした。

すると、今度は素手で土を掘り始めた。

俺は、そのあまりの光景に驚いて、身体が反応できなかった。

「ゆ、由奈! なにやってんだよ?」

「この子を埋めてあげなきゃ!」

由奈の言葉に俺は、なにも言えなかった。

「この子はなにも悪くないのに殺されて……、カラスに食べられて

いたんだよ！ 誰かがちゃんと葬ってやらなきゃ！」

由奈の手は土で汚れ、痛々しかった。

「そんなのにも由奈がやることないだろ？ 由奈が轢いたわけじゃないんだし、手だって、服だって汚れてるんだぞ！」

俺のその言葉に由奈の穴を掘っていた手が止まった。

「そんなの……、どうってことないじゃん。この子を轢いた人だつてきつと悪くない。轢かれたこの子も悪くない。ただ運が悪かっただけ。もしこの子を轢いた人がここを通らなければ、もしこの子がここを通らなければ……」

俺は、由奈の言葉を静かに聞いていた。

「一樹……、悪い人なんていないんだよ。どんなことにでも必ず理由があるの。見る人によれば、この子を轢いた人が悪いという人もいれば、道路に飛び出してきたこの子が悪いという人もいる。見方一つで悪くも良くもなる。大切なのは誰が悪いかじゃなくて、その後はどうするかだよ」

「どう……するか？」

俺のその問いに由奈は静かな口調で答えた。

「轢いたのは仕方がない。轢かれたのも仕方がない。もう起きたことは取り返しがつかない。でも、どちらがどうであれ、そこに命を失った子がいる。だったらあたし達にできることは一つしかないよ」

……由奈の言う通りだった。気が付かない振りをするのではなく、見捨てるのでもない、今ここで自分出来ることをやらなくてはならない。意味はなさない。

気が付かない振りをすることも見捨てることも簡単だ。

でもそれは、逃げなんだ。

由奈は、逃げないことを選んだ。手や服を犠牲にしても逃げないことを選んだ。

目の前で起きている死という現実から逃げようとしていた自分が無償に恥ずかしくなった。

由奈は、再び素手で土を掘っている。

「由奈、どいてくれ。俺が掘る！」

そうやって俺は由奈にどいてもらい、俺も素手で土を掘り始めた。

今、自分に出来ることを精一杯やらなくては意味がないんだ。俺が出来ることはそれしかないんだから。それをやらないことは逃げなんだ。

俺の手も、服も土の汚れで汚くなっていたが、不思議と気にならなかった。

今、自分に出来ること……。

そうだ。牧村大輔を死刑にすることが正しいかどうかなんて答えは今出るはずがない。だって俺はなにもしていないから。今、自分
が出来ることをやろう。

そう思った俺は、資料に添えられていた牧村大輔の両親のいる住所を調べ、すぐにそこへと向かった。

牧村大輔の両親は意外にもすぐ近くに住んでいた。車で行っても30分ほどのところだ。

俺は、車に乗り込みすぐにその住所へと車を走らせた。

と、突然携帯が鳴った。友達の肇はじめからだった。

「どうした？ いま運転中なんだけど」

『あ、悪い。いや、ちょっと由奈の墓参りに行きたいと思って』

肇は高校の時の友達だ。だから俺と由奈が付き合っていたことも由奈が殺されたことも知っている。

「墓参り？　なんで急にそんな」

『いや、だってさ俺、由奈が死んだ後、一度しか墓参り行っていないから……、お墓の場所もよく覚えてないし、一樹なら当然知ってると思って電話したんだ』

「分かった。じゃあ明日家に来いよ」

『悪いな、ありがとう』

その言葉を言い終わると電話は切れた。

墓参りか、俺はついこの間行っただけなんだけど、まあいいか。

そんなやり取りをしていると俺は、牧村の両親の家に着いた。

そこは、昔風の家だった。ずっとこの家に住んでいるのだろうか。

俺は、家の呼び鈴を鳴らした。

中からは、ドアを開け父親らしい人物が出てきた。大きい身体にがつちりした顔をしている。

「あの、牧村大輔の親父さんですか？」

「大輔ー！？ あんな親不幸もんはうちの子じゃねえー！」

そう怒鳴ると家のドアを閉めてしまった。その意外な展開に唖然としてると再びドアが開いた。中から出てきたのは母親らしい人物だった。気の優しい感じがした女性だった。

「ごめんなさいね、えつとどちらさんですか？」

「あ、俺……、いや僕神谷一樹と言います。実は……」

俺は、自分が息子さんの死刑の担当をすることになったことを話した。

「そう……、あなたが……」

母親であろうその女性は不意に悲しいそうな表情になった。

「あの……、牧村大輔について教えてくれませんか？」

俺のその言葉を聞き、悲しい表情を浮かべていた母親は笑顔でうなずいた。

母親の話からはいろいろなことが出てきた。手紙で読んだ内容と同じことも出てきたが、それ以外にもたくさんのが。

話をしている途中で母親は涙を流し始めた。辛いかもしれない。

いくら異常殺人鬼と言えどもお腹を痛めて生んだ我が息子。心配なわけがない。愛していないわけがない。

人を殺すというのはそういうことなのかも知れない。殺した人の残りの人生を全て背負って生きていく。

俺は、制度で偶然選ばただけだけど、それでも人を殺す以上やはりその人のことは知っておきたいと思う。

こうやって話を聞いていると人によっていろんな人生があるんだなと思う。俺とは違う人間なのに同じ部分も持っていて新鮮な部分もたくさんあって。

ほとんど俺と変わらない。

もしかしたら、普通の人と殺人鬼は紙一重なのかも知れない。本能をそのまま自由に解放するか、それを抑止するかだけの違い。俺

は抑止できている……今は。牧村大輔は自由に解放させているのかもしれない。

正反対のようだけど、同じ人間。心の開け方が少し違うだけの。

俺は、母親の話が終わりそうなところを見計らって聞いた。

「あの、さっきの人は父親ですよ？ どうしてあんな……」

「あー、お父さんはね。自分の息子が人殺しをしたっていうのを認めたくないのよ。ごめんなさいね」

俺は横に首を振った。

父親の気持ちも分かる気がする。自分が大切に育ててきた息子は異常殺人鬼でいま死刑を迎えようとしている。そんなこと普通の人なら信じられない。いや、信じたくない。

俺は、話を聞き終わると、両親の元を後にした。

俺が死刑を執行する牧村大輔は、異常殺人鬼……。

だけど、その殺人鬼のことを心から心配し、愛しているものがある。

世の中の大半は、牧村大輔が死ぬことで喜ぶかもしれない。でも……、必ず悲しむ人もでてくる。あの両親のように……。

本当に牧村大輔には死刑意外に手は残されてはいないのだろうか。

俺は、牧村大輔は死ではなく別の方法で罪を償うべきではないかと思うようになっていた。

次の日、俺はついに会社を休んだ。行く気にはなれなかった。なぜならもうすぐ死刑執行予定日だったからだ。それに今日は肇と由奈の墓参りに行く約束をしていたし。

「おーい！」

突然、玄関の外から声がした。この声の主は肇だ。

俺は、急いで玄関まで行きドアを開けた。

「オッス！ 元気か？」

その言葉に俺は普通に笑顔で元気をみせてみたが、空元気だということとはすぐに見破られた。

「元気ないなー。なにかあったのか？」

俺は、肇を車へと誘導し、車に乗せ車を出した。その車内で肇の質問に答える。俺が死刑執行人制度に選ばれたこと、その相手が異常殺人鬼だということ、そして由奈のカタキだということ。

「もしかして由奈はカタキを討ってほしいのかもな」

静かに俺の話聴いていた肇が突然言った一言。俺はその一言に思わず声が詰まった。

「だって、普通に考えて見ろよ。宝くじで当たるより当たりにくい死刑執行人に選ばれて、さらにその相手が由奈のカタキだなんて、どんな確率だよ。由奈が復讐を望んでいるとしか思えないね」

確かに、ありえないほどの確率だ。由奈がカタキ討ちを望んでいるのか。自分を殺し、あげくに右腕を食べた牧村大輔に死の制裁を望んでいるのか。

それが、由奈の望みなのだろうか。

もし、由奈がそれを望んでいるのなら……、いや由奈がそれを望んでいなくても俺は、この男を本気で殺したいと思った。

由奈はコイツに夢をも奪われたのだ。あの時、言っていた夢さえも。

「ナイスシュート！」

ゴールにボールが入る。俺は体育館でバスケの練習を夜遅くまでしていた。由奈はそれを座って見ている。

「上手いねー、一樹。将来はプロバスケット手かな？」

「バーカ、そんな簡単にプロのバスケット手になれるかよ」

俺は、ボールをつきながら走りドリブルに発展させゴールしたでジャンプし、軽くゴールにボール乗せる感じで置いた。そのままボールはゴールに入り、床に着いたボールは体育館の床を響かせる。

「そついう由奈の夢はなんなんだよ？」

「あれ？ まだ言ってなかったっけ？」

俺は、転がったボールを取りに行く時、由奈の横を通りながら軽く返事をした。

「あたしの夢は、歌手だよ」

その言葉に、取る筈のボールをとり損ねてしまった。これが試合だったのなら俺は交代させられているだろう。

「か、歌手ー？」

「失礼ね。なんなの？ その驚きかたはー！」

由奈は顔をカエルのように膨れさせ、膨れっ面を見せてみた。かわい。

「一樹だって、文化祭であたしの歌声聞いて、綺麗だったって言うてくれたじゃん」

確かに由奈は、歌が上手かった。おまけに透き通りいつまでも心に残る余韻を持った声は、一度聞いたら忘れられない。

俺にとつてはそこ等の歌手よりも由奈のほうがよく上手に歌っているように感じられた。

「歌手か、大変だぞー！」

俺は、そう言ってボールを拾い、ゴールを狙ってシュートしようとしたが、それは由奈の声によって止められた。

「あ！ 待って！」

「な、なんだよ？ いきなり大声出して、ビックリするだろ」

「ねえセンターラインからシュートして決めること出来る？」

由奈の言葉の真意がよく分からなかったが、とりあえず俺は正直に答えた。

「センターラインからか……、決めたことはないなー、ちょっと難しいかも」

「だったらさ、チャレンジしてよ」

俺は思わず視線を由奈に向ける。

「センターラインからシュートを打って、もし一発で決めることが出来たら、あたしは歌手になれる。一樹はプロバスケット手になれる……でどう？」

「面白そうだな、やってやるよ」

俺は、センターラインまで移動し、バスケットボールを床に一度つき、跳ね返ってきたボールを両手で掴むと、シュートの体制になった。そして、ジャンプしながらボールをゴールに向けて放った。

ボールは楕円を描きながらゴールに吸い込まれるように飛んでい

く。

そして、ボールはゴールの枠に当たり、ネットを揺らすことなく、無残にも床へと落ちていった。

体育館には空しくボールが転がる音だけが響いた。沈黙が2人を襲う。

「……ハハッ。ま、まあそんなうまくいくわけないか」

俺は、由奈の悲しむ顔が見たくなって無理やり明るく振舞った。

「まっ！まだまだ努力が足りませんってことだね。あたしも一樹も」

由奈は悲しむ様子を見せることなく、笑顔で前向きとも取れることを平然と言つてのけた。

このときの結果は残念に終わったが、俺は夢への希望は一度も忘れたことがなかった。きつと由奈も歌手に本気でなりたかったんだと思う。

牧村大輔は、由奈の夢をも無残にも散らさせた。この殺人鬼は華を咲かせたいと願っていたつばみを無残にも摘み取ったのだ。

由奈は復讐を、カタキ討ちを願っているのだろうか。

自分を殺し、幸せや夢を奪ったこの殺人鬼に。

確かに俺がこの男の死刑を実行すればカタキ討ちは、復讐は完成する。

俺は、そんなことを思いながら肇と一緒に、由奈のお墓の前で手を合わせていた。

中編：死刑実行

そして ついに死刑執行日の朝がやってきた。

部屋の中に、呼び鈴の音が響く。誰かが来たようだ。

いや、俺は誰が来たかを知っている。俺の準備も整っている、身だしなみもきちんと整えた。食事は食べることができなかったが。

俺は、玄関まで行きドアを開けた。

そこには、黒いスーツを着た男が2人立っていた。いや……、これは喪服だ。

「おはようございます。神谷一樹様。我々2人が死刑執行場までご案内致します」

丁寧にあいさつをした2人に連れられて俺は、彼らが用意していた車の後ろの席に乗り込む。

これから、死刑施行場へと移動するのだ。

すると2人の男のうち1人が俺に紙を手渡した。そして、紙に書かれている内容を話し始めた。

「神谷様、まずあなたにはこれから死刑執行場にて死刑囚と一時間ほど話をして頂きます。基本的には明るい会話で最後の時を過ごしてもらおうようにしていますが、希望を与えるようなことは言わないでください」

俺は、紙に書いてある内容と合わせながら男の話を聞いていた。

「一時間の会話が終わりましたら、死刑囚を死刑台へと案内してあげてください。そして死刑囚を椅子へと座らせて足枷と手枷をつけてください。それが終わりましたら、椅子の前においてあるバケツから水に濡れたスポンジを取り出し、頭に乗せ、最後に頭に電気拘束具を取り付けてください。それで準備は終了です」

男は紙に書いてあることをほぼそのまま言っている。どうやら内容を完璧に把握しているようだ。

「準備が整ったら同じ部屋に設置してある赤いスイッチを押してください。スイッチを押せば電気拘束具から高電圧の電気が流れ、死刑囚を死に至らしめます。その後は死亡を確認して頂き、確認されれば終了となります」

よほど言いなれているのだろうか。平然な口調でさらりと言つてのける。言っている内容はとても怖いことなのにこんな言い方をされると怖さもあまりない。

「他に質問はありますか？」

その問いに俺は首を横に振った。分からないことがないわけではない。なにがわからないことなのかさえも分からないのだ。

それを言い終わると、男はその後一言も話すことがなくなり、車内に沈黙が走った。

しばらく、走った後、急に車は停まった。

「着きました。神谷様」

その言葉を聞いた俺は、車のドアを開けて車外に出た。

俺の目の前には、鋼鉄で張り巡らされた、まさに鉄壁とも言つべき建物が姿を現した。

ここが、死刑執行場。

死刑執行場に到着した俺は、喪服を着た2人に案内され、中へと入っていく。いまからここで人が死ぬのだ。

中へと入ると、窓もなく、なんの塗装もされておらず、鉄の色がむき出しとなっている。所々錆びていて、古臭い匂いと雰囲気漂わせている。

その建物を奥へ進むと、少し広めの個室へと出た。

個室には中央に机があり、椅子が2つ用意されている。そこには数人の男と女がいた。部屋の右を見ると、モニター室らしき部屋がある。パソコンやらモニターなどの機械類がたくさん置いてあることからそれはモニター室で間違いないだろう。

次に俺は、部屋の左側に視線を移動させた。

そこには、死刑台が置いてあった。

かなり大きな機械だ。こんな異様な雰囲気漂わせたものを俺はいままで一度も見たことがない。

それを見た俺は、心臓の鼓動が早くなり、喉が乾いていく感覚に襲われた。手には汗をかき、背中を汗が流れ、背筋が凍る。鉄に囲まれ錆びに匂いのするこの個室から発せられる匂いはまるで死刑をされたものの死体の焼け焦げた匂いだとさえ感じられた。

この死刑台により、いままで何人の人間が死刑となったのだろう。ここには無念にも死刑となったものの魂が数多く宿っているような気がした。

俺が部屋の様子を、恐る恐る伺っていると1人の男が話しかけてきた。

「はじめまして、神谷一樹さん」

その男は、眼鏡をかけている初老の男だった。周りにいる人間とはまったく別ものの異様な雰囲気を持っている。男の目を見ていると、暗示にでもかけられた気分になる。

「私は、この死刑執行場の責任者のYと申します」

「Y?」

俺は、いままでなかったはじめてのタイプの名乗り方に思わず聞き返してしまった。

「ええ、我々は名も無き人間なのです。人の命を奪うものですから、ご理解ください」

確かにここにいる人間は男も女も、一般人のそれとは違う雰囲気

を持っているようだ。だが目の前にいるこのＹという男はそれすらも凌駕した雰囲気を持っている。

「車でここへ向かう途中説明を受けたと思いますが、これからあなたには死刑囚と一時間程度の会話をして頂きます。つとその前に……、最初あなたの元へ送らせて頂いた黒い封筒の中身は全て読まれましたか？ この死刑執行に関する内容が書かれた紙です」

俺は、言葉は発することなく大きくうなずいた。

「そうですね、ならば大丈夫ですね」

大丈夫……、俺はＹの言った言葉の意味がよく理解できなかった。なにが大丈夫なのだろうか。俺の精神面の話のことだろうか。

「それでは、入ってきてください。牧村大輔さん」

その言葉に俺は思わず顔を上げる。牧村大輔……、俺の大好きだった由奈を殺した異常殺人鬼。

Ｙが言葉を言い終わった後、右のモニター室から手錠をした男が入ってきた。その男は裸足で、紺色のツナギを着ている。そして、一言も言葉を発することなく、用意されていた椅子に座った。

その顔は、牧村大輔の資料と一緒にあった牧村大輔の顔の写真と一致していた。そうこの男は間違いなく牧村大輔なのだ。

「それでは我々はモニター室に行きますから、神谷さんはそちらの椅子へと座り、牧村大輔との会話を始めてください」

俺は、そう言われると恐る恐る椅子へと近づき、椅子へと腰を降ろした。それを確認した彼らはモニター室へと移っていく。

今、俺の目の前には由奈のカタキが座っている。牧村大輔という異常殺人鬼が……

この男となにを話せばいいのか。話す内容は決めてきた。俺がこの男に聞きたいことと言えば1つしかない。由奈のことだ。

だが、この周りの雰囲気吞まれて第一声をだすことが出来ない。そうやって、俺が躊躇していると目の前にいる男が声を出した。

「あんたが、俺を殺す男か……」

その男の目には、何日も寝ていないのかクマがはっていた。目も虚ろで焦点があっていない。

「……、あんたに聞きたいことがある」

男の第一声によって壊された雰囲気により、俺はようやく声を出すことが出来た。

「なんだ？」

「殺した人達のことば覚えているのか？」

俺は、今殺人鬼と話しているのだ。なんだか不思議な気分だ。

「ああ、全員覚えている」

男の話し方は淡々としている。質問に答えるだけで多くを話そうとはしない。

「……葵由奈という女の子を覚えているか？」

「名前は知らない。俺が食べた身体の部分の部分を言ってくれば分かる」

牧村大輔のその言葉に、俺の背筋は氷付いた感覚に襲われた。額からは汗を流し、心臓の鼓動がより一層早くなる。

そして、俺は息を呑み答えた。

「右腕だ……」

いやな答えだ。由奈のあの時の光景が思い出される。

あの 無残な姿で死んだ由奈の亡骸の姿が。

あの時、あの光景を造りだしたのは、今目の前にいるこの異常殺人鬼なのだ。

「右腕か……、あの駅の裏路地で殺した女だな」

本当にこの男は、食べた部位だけでそれを言い当てた。

「あの女は、極上だったな……、実に美味かった。襲ったときに発した声もなかなかそられた」

由奈の右腕を食べた。いまの男の発言で俺はそれをハッキリ自覚

した。

その言葉と同時に、怒りと俺の中の復讐という炎が大きく燃え上がった。またこんな男から由奈を守れなかったのが死ぬほどに悔しかった。

由奈は襲われたときどんな気持ちだったのだろうか……。

あの時、俺は近くにいた。よく耳を澄ませば由奈の助けの音が聞こえたかもしれない。けど俺は、いつまでも現れない由奈に多少のイラつきさえ感じていた。

由奈が殺されそうになっていることも知らずに……。

俺が由奈を殺した気分になった。その後しばらく沈黙が続いた。

『神谷さん、話をしてください』

突然室内にマイクでの音声が入る。さっきの初老の男だ。だが今は話す気にはなれない。

『神谷さん、あなたは牧村大輔の両親に会ってきたでしょう？』

俺は、その言葉にハツとした。なぜそのことを知っている……、誰にも言うてはいないのに。

「な、なんでそのことを？」

『知っていますとも、我々はあなたがこの制度に選ばれた日からずっとあなたを監視していましたから』

人権など無視なのか。いや、人を殺す仕事をしているやつ等だ。そんな常識など関係ないのだろう。

「あんた、俺の両親に会ったのか？」

牧村大輔が俺に話しかけてきた。俺はその問いに静かにうなずいた。

「そうか、なにか言ってたか？」

「……、母親も父親もあんたのことを心配してた。あんたがどんな人間だったのか聞きに言っていたんだ」

「そうか……、親父にもお袋にも迷惑かけているんだな。俺はどんなでもない親不幸もんだな」

牧村大輔の顔は、悲しむに溢れた。

この男にも感情があるんだと思った。

「でも、仕方ないさ。俺は自分の欲求を抑えられない。どうしても殺してしまうんだ。人の肉を食べたいがために」

いままで多くを語ろうとしなかった。男の口数が増えてきた。

「はじめはそうでもなかった。なんとか抑えることが出来たんだ。でも、あの時のことを思い出してしまう」

あの時というのは恐らく山での遭難事件のことだろう。

あの遭難事件でこの男は変わってしまった。

周りの部員達が、死んだ部員の肉を食べているときもこの男は食べなかったらしい。そうして部屋の間で震えていた。そんな牧村大輔が次の食料に選ばれるのは自然の成り行きだったのかもしれない。

殺される……、そんな極限の状況でとった男の行動は本能的には正解なのかもしれない。しかしその反動で理性はどこかへと消えてしまったんだろう。

牧村大輔は襲ってきた部員達、全員を返り討ちにし、殺した部員達の肉を食べ、救助隊がくるまでを生き延びた。

極限は人を変える。それは俺も同じだった。

俺は、法律によりこの死刑執行人制度に選ばれた。

この法律という逃げ場のないものは俺を変えた。

そして、いままでは関係ないと思い無関心だった出来事に真剣に目を向け、多くの人の話を聞き、多くを調べ、時には由奈の言葉に耳を傾け、友達に相談し、自分で考え、行動してきた。

きっと人生の中で、これほど動いたことはないだろう。

俺は、この死刑執行人に選ばれたことで人の命とはどういうものかをしっかり考えることが出来た。

由奈の死。殺した男。残された俺。

その全ては、俺が命の大切さを知るために必要な流れだったのかも知れない。このうちの1つでもかけていればきっと一息が付かなかった。

命の重みに。

もう俺の答えは決まっている。

「Ｙさん、ここから出してくれ」

『どうしました？』

「俺の答えは決まっている。俺は……、この男を死刑に出来ない」

『……、どうしてですか？』

俺は椅子から立ち上がり、モニター室のほうを見て話始めた。

「この男のしたことを許したわけじゃない。でも、死刑なんかでは罪は償えない。俺はこの牧村大輔は生きて罪を償うべきだと思う」

牧村大輔のほうに視線をやると驚いたような表情をしている。俺は再びモニター室に視線をやった。

「この男が殺した人たちのためにも、この男は生きて、社会に貢献し多くの人を救うために生きるべきだと思うんだ。そうすることが本当の意味での罪を償うということに繋がるんじゃないのか？ 死

なんてのはただ逃げているだけだ」

俺は、手に汗を握っていた。こんな状況で自分が言っていることを誰もが不思議に思うだろう。しかし、俺は意見を変えるつもりはない。

「その男は、あなたの恋人だった葵由奈さんを殺しているのですよ？」

「由奈は……、今も俺の中で生きている。最初は、由奈の復讐が出来ると思った。牧村大輔を殺して、由奈のカタキを取れば由奈も報われると思った。それが由奈の願いなんだと。でもそれじゃあ俺も同じなんだ！」

俺は、声を張り上げている。

「牧村大輔にも自分の息子のことを真剣に心配する両親がいる。裁判で死刑に決まったからって諦めているようだったけど、心の底では元気に帰ってきてほしいと願っているはずだ。そして立派な人間になってほしいと願っているはずだ。俺はこの男の両親の話を聞いてそう思った」

俺は、今どんな表情をしているのだろうか。きっと誇りに満ちた顔をしているはずだ。

「死刑なんかでは、なにも解決にはならない。だから俺はこの男を死刑にすることは出来ない！」

「……、分かりました。気持ちは変わらないようですね。では、牧村大輔の死刑は取りやめにします」

俺の心は達成感で満ちた。

きつと由奈もこうなることを願っていたはずだ。由奈は誰よりもやさしくて、誰よりも命の大切さを知っているんだから。

『それでは、おねがいします』

Yの言葉の後に先ほどの喪服を着た男が2人個室に入ってきて、俺の両腕を掴んだ。

「え？」

俺はその行動の意味が理解できず、されるがままだった。

俺は2人の男に引きづられ、死刑台のある部屋へと入っていった。

そして、死刑台の椅子へと座らされ、手枷と足枷を付けられた。

「ちょ！ どういうことだよ？」

『おや？ ちゃんと封筒の中身は読まれたんですね？ 書いてあったはずですよ』

その言葉に俺は封筒に書いてあったことを思い出していた。

『死刑執行時に死刑実行を拒否される方は変わりに死刑となります……』と』

その言葉に俺の心臓は激しく脈打ち、俺は必死に封筒の中身の内

容を思い出そうとしていた。しかし、どんなに記憶を探してもそんな記述は思い出せなかった。

『……、もしかして裏面はお読みになっではないんですか？』

裏面……、裏面なんて知らない。俺は表面だけだと思い、裏面なんかまったく見てはいない。それにあの時は裏面があるなんて気が付ける状況じゃなかった。

「ま、待ってくれ！ 裏面にも書かれているなんて知らなかったんだ」

『いえ、もう遅いです。あなたはちゃんと読んだと言った。あの時点でこの制度からは逃れられなくなっていたんです』

その瞬間、喪服を着た男に口にガムテープを張られた。声を言葉にすることができない。

『神谷一樹さん、あなたは……死刑です』

その言葉と共に水に濡れたスポンジが俺の頭に置かれ、電気拘束具が取り付けられた。そのため視界のほとんどをさえぎられたのだが、わずかに見える隙間からは男が立っているのが見える。

男は赤いスイッチの前に立っている。

それは、牧村大輔だった。

俺は、必死に抵抗し、手枷や足枷をはずそうとするがビクともせず、外れない。このままでは本当に死んでしまう。

俺の額からは汗が噴き出し、目は痛いくらいに充血しているのだろ。手からも汗がにじみ、喉は渴き、口から出来ない息は鼻からの循環をより強くしていた。声は言葉にならず唸るだけ。

「神谷一樹だっけ？」

男の声が聞こえた。この声は牧村大輔だ。

「俺の命を救ってくれてありがとな。あんたには感謝しているよ」

俺は必死になって、助けを求めようと暴れる。だが手枷と足枷、さらに頭の電気拘束具が邪魔で自由に身体を動かすことができない。

「でも俺が生き残るためには、あんたを死刑にしなきゃいけないらしい」

牧村大輔の声など、もはや俺の耳には届いていなかった。

「だから、死んでくれ。俺……まだ生きたいんだよ」

かすかに見える隙間からは、牧村大輔が見える。

その手は、確実にスイッチのほうへと振り下ろされていく。

そして、牧村大輔の手はなんの狂いも躊躇いもなく、スイッチを押した。

それが

俺の見た最後の光景だった。

後編：真実

そこには、一通の手紙があった。

それは、不思議な不気味さを漂わせている黒い封筒だった。封筒には名前だけが白い文字で書かれていた。

”三宅 隆二様”と。

「おい、隆二それなんだよ？」

「あ？ 何か？ へへっ！ これは、死刑執行人制度の決定通知書だよ。死刑執行人に選ばれたんだ」

俺は、封筒を高く上げて見せる。

「げえー！ マジかよ！ 最悪だな」

「あ？ なんで？」

「だって、お前、それ受け取ったってことは人を殺さなきゃいけないんだぜ？」

「いいじゃねえか。俺、一度人って殺してみたかったんだよな。法的に人を殺せるんだぜ？」

「お前、ほんと悪だな」

「はっ！ 当たり前だろ？」

俺は、いわゆる不良だ。世の中腐ってる。親も社会も政治も。俺は、そんな世の中が嫌いだ。だから俺は誰にも囚われない。自分の生きたいように生きて、自分のやりたいことだけをやる。ム力つけば殴るし、欲しいものがあれば盗る。万引きなんて簡単すぎて、毎日やってる。俺に喧嘩を売ってくる奴は、全員返り討ちに出来る実力も持つてる。

俺は、小さい頃から空手をやっていたからな。高校はK-1をやっていたし。馬鹿はそんなことも知らずに挑んでくる。いままで何人半殺しにして、病院送りにしたかわからねえ。けど、俺はいままで人を殺したことはない。そんな俺に巡ってきた最大のチャンス。死刑執行人制度。法的に人を殺すことが出来る。

「それで、死刑にするやつってどんなやつか分かってるのか？」

「あ？ ああ、前に郵便屋が速達で資料持ってきたぜ。名前は確か牧村つつたかな。なんでも異常連続殺人鬼みたいだぜ。趣味の欄に人間狩りって書いてあったな。そいつも相当な悪だったなー！だが、死んじまうんだなー！」

俺は、愉快だった。世の中悪いこととして捕まる奴もいりや、俺みたいに捕まらず生きてる奴もいる。牧村って奴は、捕まった拳句に死刑。ほんと笑っちゃうぜ。

「人間狩り？ そいつは相当な異常者だな」

「ああ、そう言えば。その牧村って奴が殺した奴らのリストがあったんだけどよ。そんなかに玲子の名前があったぜ」

「え？ 玲子ってお前が、昔付き合っていた女か？」

「ああ、くそアマだよ。金のために付き合ってたのが分からない馬鹿だったな。散々利用された拳句に異常殺人鬼に殺されてりや世話ねえよな。笑っちまうぜ！」

「そりゃあ、お前凄いい偶然だな。死刑執行人制度に選ばれるだけでもすごい確率だって言うのに。おまけにそいつが昔の女を殺した奴だなんて」

「ああ、玲子が復讐を望んでるのかもな。まあ……復讐する奴間違ってんじゃねえの！ って言いたくなるけどな！」

笑いが止まらなかった。人を殺せるのがこんなにもうれしいことだなんて。玲子のことなんてどうでもいいが、牧村ってやつには早く会いたかった。だって俺はそいつを殺せるんだから。

数日後、俺の家に喪服を着た男が二人来た。

「おはようございます。三宅隆二様。我々2人が死刑執行場までご案内致します」

「へっ！ 待ってたぜ。来るの遅せえんだよ」

丁寧にあいさつをした2人に連れられて俺は、彼らが用意していた車の後ろの席に乗り込む。

これから、死刑施行場へと移動するのんだ。

すると2人の男のうち1人が俺に紙を手渡した。そして、紙に書

かれている内容を話し始めた。

「三宅様、まずあなたにはこれから死刑執行場にて死刑囚と一時間ほど話をして頂きます。基本的には明るい会話で最後の時を過ごしてもらおうようにしていますが、希望を与えるようなことは言わないでください」

俺は、静かに男の話を聞いていた。

「一時間の会話が終わりましたら、死刑囚を死刑台へと案内してあげてください。そして死刑囚を椅子へと座らせて足枷と手枷をつけてください。それが終わりましたら、椅子の前においてあるバケツから水に濡れたスポンジを取り出し、頭に乗せ、最後に頭に電気拘束具を取り付けてください。それで準備は終了です」

「準備が整ったら同じ部屋に設置してある赤いスイッチを押してください。スイッチを押せば電気拘束具から高電圧の電気が流れ、死刑囚を死に至らしめます。その後は死亡を確認して頂き、確認されれば終了となります」

「へいへい。とにかくボタン押せばそいつは死ぬんだろ？ それさえ分かればほかはどうでもいい」

「他に質問はありますか？」

「ねえって」

それを言い終わると、車の中には静寂が走り無言のまま走ってい

った。しばらく走ると車はある建物の前で止まった。

「着きました。三宅様」

「へえ、ここが死刑執行場か。気味の悪い雰囲気だな」

車から降りた俺は、辺りを見渡す。その辺りにはその建物以外なにもないようだ。俺は二人の男に連れられ建物の中に入っていく。建物の中は所々、塗装が剥げていたりして、古めしさを感じさせた。

「きたねえところだな。ちゃんと掃除しろよ」

しばらく歩いていくと、広い部屋に出た。中央には机が置いてある。部屋の左には、死刑台があった。

「おお！ あれが、死刑台か！ 意外にデカいもんだな。いままあれで何人殺したんだ？」

目の前に現れた死刑台を眼にして俺は、感情が高ぶっていた。

「はじめまして、三宅様」

俺の前に現れたのは眼鏡をかけた。初老の男だった。

「あん？ なんだ？ てめえがここの責任者か？」

「ええ、はじめましてYと言います」

Yと名乗った男は、気味の悪い笑顔を浮かべた。

「Y？ イニシャルかなんかか？」

「いえ、我々には名前がないのです。人を死に至らしめる仕事のため、ご了承ください」

「はっ！ どうでもいいさ。とにかく早く牧村ってやつに会わせてくれよ」

「その前に、お渡しした資料はきちんと読んで頂けましたか？」

「あ？ ああ、資料なら読んだぜ！ だから牧村って名前の異常殺人鬼のことも知ってるんだろ？」

「そうですね。失礼致しました。それでは大丈夫です。では牧村大輔さん、入ってきていただけますか？」

男の声と同時に、奥のモニター室のような部屋から資料にあった写真の男が出てきた。

「へえ！ あんたが異常殺人鬼か？ 俺がお前を殺す者だぜえ！」

「それでは三宅様、ここに来るまでにお聞きになったと思いますが、これから一時間牧村さんと話をして頂きます」

「あ？ そんな必要ねえだろ。さっさと死刑台に座らせてくれ」

「……そういうわけにはいきません。これは、法律であり、規則であり、道德として当然のことです」

「だから、殺人鬼と話すことなんぞ、なにもねえって言うてんだよ」

俺は、とにかく早く殺人鬼を死刑台に座らせて死刑にしたかった。早く人を殺したかった。

「……三宅様、あなたは死刑執行人制度というのをよく分かっていないようですね。死刑執行人制度は、あくまで死刑を執行するものの代理人を勤めていただくものです。よって通常の過程を無視するわけには行きません」

「あ？ そんなんでもいいんだよ！ 俺は早くこの牧村つてやつを殺してえんだよ！ コラッ！ 牧村あ！ ボーと突っ立てねえでさっさと死刑台につきやがれ！」

牧村はそんな俺の言葉にもまったく動かず、その場でただ無表情で立っていた。

「分かりました。三宅様。それでは、お二人共よろしく願いします」

「あ？」

Yの言葉の後、喪服を着た二人の男が俺の両腕を掴んだ。

「なにすんだ！？ 離せ！！ コラッ！」

俺は、空手でそいつら二人を突き飛ばした。突き飛ばされた二人は無残にも尻餅をついている。

「どういうことだ？ 死刑になるのは牧村のほうだろうか？」

「やれやれ……、勘違いしていますよ三宅様。死刑になるのは、はじめからあなたです」

「あ？　なんだと？」

「本来は、相手への情けの意味も含めこのことは言わないのですが、あなたには道徳というものが通じないようなので言わせて頂きます。本来死刑執行人制度は先ほども言ったように、死刑執行人の代理を勤めていただくものです。しかし、それは表向きの制度です」

「……」

俺は、Yの言ってることを理解するのに必死で言葉を返すことなく静かに聴いていた。

「あなたは、我々死刑執行に関わるものたちの内情を知っていますか？　それは、実に暗くて底が深い。なんせ人を殺すのが仕事だ。まともな神経じゃあ一步も進むことが出来ない。だから、死刑を執行するものには、精神的に異常なものが選ばれます。例えば、平気で人を殺せるような……ね。そんな私たちには娯楽というものが無い。普通の人とは違うのだから仕方がないと言えば仕方がないのだが、それではあまりに不公平だと思わないかい？」

「……」

「そこで、我々は考えたのだ。我々なりの娯楽を……」

「どういうことだ？　話が見えてこねえな」

「出てきてもいいですよ。Aさん」

Yの言葉に反応して、モニター室らしき部屋から一人の男が出てきた。どこかで見たことがある顔だ。でも一体どこで。

「見覚えありませんか？ あなたに郵便を届けた郵便局員ですよ」

確かに、そう言われるとそうだ。あの時、俺に黒い封筒を持ってきた郵便局員だ。

「彼は、郵便局員役をやっていたみたいです。部屋の奥にはまだ、牧村の両親役をやっていたいている方や他にも様々な状況に応じて動いて頂いている方達があります。ちなみに牧村は殺人者役です」

「殺人者……役？」

「ええ、実際彼は法的な殺人以外は犯していません。あなたの元に渡した彼が殺した者達のリストがありますよね。」

あそこに書かれている23人は、実際に死んだもの達です。でも彼らの死に方はいろいろです。殺されたもの、事故に遭ったもの、病気になるもの。しかし我々にはどうでもいいことだ。我々が必要としているのは、刑事的に原因が分からない死に方をしているものとそれに近い関係でいた者だけ。それさえあれば、後はどうにでも仕立てることが出来る。例えば、前回ここで死刑になったものはそこにいる牧村に最愛の彼女を殺されたと思っていました。そして、復讐のつもりでできたのかと思いきや、死刑には出来ないなどとうつつを抜かす始末。ほんと笑えます。……分かりましたか？ つまりここに来たものは必ずあなたも含めて、死刑執行人に選ばれた時点で我々のおもちゃとなって死ぬ運命だったのですよ」

「ふ、ふざけるな！！ 俺が死ぬだと？」

「ふふつ、当然ふざけているに決まってるじゃないですか……、娯楽だと言ってるでしょ」

「ふざけるな！ お前らの娯楽のために俺を殺すっていうのか？」

「そうです。この仕事をしているとほんと病んでくるんです……。こういう風に相手をもてあそんで殺すと実に楽しいですよ。さんざん自分が殺す気で来たのに、逆に殺される。その時の相手の顔と来たらもう……。笑わずにはいられません。だから、あなたも見せてください。恐怖に歪んだ顔を！！」

Yという男の顔は、人間ではないと思った。ほんとうに人間の顔なのかと疑ってしまう。あれは、まさに悪魔の笑い顔だ。どれだけ強くいきがっても決して覆らない強靱な悪魔の顔。

さきほどの男だけでなく、今度は多数の人間が俺に襲い掛かる。俺を動けなくするためだ。大多数で捕まれ俺は体を動かすことができない。どれだけ必死に抵抗しても。

「そつだ……。Cさん、ちょっときてください」

YとCという男がなにかを話している。

「おい！ 離せ！！」

俺は必死に抵抗した。今ここで抵抗しなかったら殺されるからだ。俺はまだ死にたくない。でもそんな抵抗もむなしく俺は、電気椅子には座ることなく、台の上に立たされた。ロープでしっかり固定されて。

「くそ！ 解け！ 俺はまだ死にたくない！！」

「三宅様、あなたは実に運がいい。我々が最近開発した新兵器の実験台となっただけです」

そう言っYとCが笑顔で持ってきたのは大きな大砲のようなものだった。

「これは、まだ名前もついていない新兵器です。安心して下さい。痛みは感じません。一瞬で木っ端微塵になりますよ」

「嫌だ……。なんで俺がこんな目に！ ふざけるな！ 離せ！！」

俺は、必死にロープを解こうとするがロープは一向に外れない。

Yは大砲のセッティングをしているようだ。

「さあ、三宅様できましたよ。それでは、いきます」

悪魔の笑みをしたYが大砲の側面についているボタンをなんの躊躇いもなく押した。大砲からは変な音が聞こえてくる。次第にその音は大きくなる。

「い、嫌だ！ や、やめてくれえええ！！」

俺のその言葉を聴き終わったのとほぼ同時に大砲から驚異的なスビードでなにかが発射された。

それは、俺の体の一部をえぐっていった。

足と頭を残し俺の胴体だけを。

「死刑……完了です」

了

後編：真実（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。

いかがでしたか？これは『狂った世界』シリーズの第一弾になります。全部で第四弾までありますのでどうぞよろしくおねがいします。

感想などいただけると幸いです。

また次話で死刑執行人の概要を張っておきます。ぜひそちらもご覧ください。

死刑執行人制度概要（前書き）

死刑執行人制度の概要です。

死刑執行人制度はこの内容を元に構成されています。

またこの概要は僕が作ったもので実際には死刑執行人制度はありません。

*注：死刑制度は日本に存在します

死刑執行人制度概要

〈死刑執行人制度について〉

西暦2010年に「死刑執行人の参加する死刑に関する法律」が成立しました。

死刑執行人制度とは、国民の皆様が死刑執行人として死刑の執行に参加してもらい、死刑人の座る電気椅子のスイッチを押してもらうという制度です。

死刑執行人制度は、国民の皆様の積極的な協力なくしては成り立たない制度であり、国としては皆様に制度の意義を理解していただけるよう最大限の努力をし、関係機関と協力して、分かりやすく迅速な死刑執行を実現してまいりたいと思います。

〈導入の理由〉

国民の皆様が死刑の執行に参加することにより、死刑が身近で分かりやすいものとなり、死刑に対する国民の皆様の理解が深まることが期待されています。国民が死刑の執行に参加する制度は、アメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、イタリア等でも行われています。

〈死刑執行人の選ばれ方〉

死刑執行人はこうして選ばれます。

1、死刑執行人候補者名簿を作ります。

選挙権のある人の中から、翌年の死刑執行候補者となる人を毎年抽選で選び、死刑施行場ごとに死刑執行人候補者名簿を作ります。

2、死刑人ごとにくじで、死刑執行人候補者が選ばれます。

死刑人ごとに、1の名簿の中からさらに抽選でその死刑人の死刑執

行人候補者を選びます。選ばれた方には、死刑執行場にお出でいただく日時等をお知らせします。

3、裁判所で、候補者から死刑執行人を選ぶための手続きが行われます。

裁判長から、死刑人と関係がないかどうか、不公平な死刑執行をする恐れがないかどうか、辞退希望がある場合はその理由などについて質問されます。

その質問の結果などをもとに死刑執行人候補者から除外される場合があります。

4、死刑執行人が選ばれます。
除外されなかった候補者から、死刑執行人が選ばれます。

〔死刑執行人の仕事や役割〕
死刑執行人を選ばれたら次のような仕事をするようになります。

1、死刑人との会話。

死刑執行人を選ばれたら、担当の死刑人と1時間ほど会話をしてもられます。会話内容はお任せしますが、希望を与えるようなことは言わないこと、また中傷なども禁止します。希望を与えない程度の明るい話題で死刑人との最後の時を過ごしてあげてください。

2、死刑人を電気椅子に案内する。

1時間の会話が終了したら、死刑人を電気椅子に案内してあげてください。電気椅子まで案内したら、椅子に座らせ、手枷や足枷などをはめてあげてください。その後、用意した水の入ったバケツの中からスポンジを取り出し、死刑人の頭にのせてあげてください。それが済んだら電気拘束具を頭に取り付けてあげてください。

3、死刑の執行

死刑の執行は非常に簡単です。同じ部屋に設置された赤いスイッチを押すだけです。スイッチを押すと電気拘束具に死刑人の脳から脊髄を通る高電圧の電気が流れます。

4、死刑執行の終了

死刑を執行した後、死刑人の死亡を確認してください。死亡が確認されると死刑執行人の役割は終了します。

〈備考〉

死刑執行人になることを基本的には辞退できません。広く国民の皆様に参加してもらう制度ですので、積極的な参加が求められます。ただ、学生や70歳以上の人は辞退できますし、病気や介護などの事情で死刑執行場に来ることが難しいと認められた人は辞退できます。

また仕事を理由として辞退はできません。（とても重要な仕事があり、本人自身が処理しなければ、著しい障害が生じると裁判所が認めた場合のみ辞退が認められます）。

また法律により、死刑執行の仕事に必要な日数（執行1日、事後休養2日）は職務を離れることが認められています。死刑執行のために仕事を休んだ場合、これを理由として解雇、そのほか不利益な扱いをすることは法律上禁止されています。

死刑執行人制度概要（後書き）

ありがとうございます。

感想などいただけると幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1916b/>

死刑執行人制度

2010年10月10日04時23分発行